

下町の夏祭り

長谷川 修

新緑が鮮やか季節になると、江戸下町の夏祭りを思い出す。台東区の各神社の例大祭は、五月の大型連休が明けると順番に執り行われる。九日前後の稲荷町の下谷神社をスタートに、二十日前後の三社神社（浅草神社）、六月の一二日前後の蔵前の鳥越神社と続き、ほぼ一ヶ月半の週末三日はどこかここかで祭りがある。例大祭は、金曜に神事、土曜には各町内神輿が神社に集合しお祓いを受け、日曜には本社神輿の早朝の「宮出し」から日中の町内巡行、日没後の「宮入り」までが基本形だ。ただ、本社神輿の渡御は、下谷神社では二年に一回、上野の五条天神では三年に一回の本祭りに限られる。

何といっても賑わうのは、浅草の三社祭りだ。毎年の見物客は、三日間で二百万人に及ぶ。三社の由来は、祭神が三人いることで、本社神輿も三基あり氏子町四四町を分担して巡行する。特に「宮出し」は見ものとされており、数万人の見物客は前夜からの徹夜組であろうか。

三社祭りの担ぎ手は問題だ。刺青の露出と神輿に乗ることは禁止となっているが、全く守られていない。刺青自慢のその筋らしい人物が闊歩しており、毎年のように喧嘩や怪我人がでる。

これに比べると、鳥越神社は浅草の隣町ながら素朴なものだ。本社神輿は都内随一の重さで千貫神輿と呼ばれ、担ぎ手は百五十人を超える。揉め事といえば、引継ぎ時間の超過や担ぎ棒の位置採りが主で、男子高校生の棒倒しゲームのようだ。また、「宮入り」は「鳥越の夜祭り」として名物だ。暮れかかった頃、黒紋付袴に白足袋の氏子町役員が、各々町名の入った高張提灯を掲げて先導し、千貫神輿に付けた四十張の弓張提灯の揺れる姿は幻想的だ。

ここ二年コロナの影響で、三社祭りの神輿担ぎは中止だった。今年は、「宮出し」と「宮入り」だけは神輿を担ぎ、町内巡行は、神輿三基を台車に乗せて連なって回るようだ。どこまで盛り上がるか分からないが、大勢の人がエネルギーを発散させる、あの夏祭りの熱気が懐かしい。